

若者を性感染症から守る



(絵「庭の喜び」/宮迫千鶴)

性感染症の拡大は世界的な問題ですが、近年、わが国においても若者の間での性感染症の急速な広がりが大きな社会問題となっています。

旧来の梅毒や淋菌など細菌による性感染症は、売春防止法やペニシリン系抗生物質の登場により激減しましたが、それに代わってペニシリンの効かない、症状のあまり出ないクラミジア感染症が増加してきました。1985年にエイズ症例が報告されてからは、無症候のクラミジアや HIV (human immunodeficiency virus) 感染者数が増加し、現代は無症候性 STI (sex transmitted infection) / HIV 時代とも呼ばれています。

また、初交年齢の低下に伴って、10代女性のクラミジア感染率の高さが将来の不妊につながるとして憂慮されています。女性では感染を受けても自覚症状に乏しいため、無自覚のうちに男性パートナーや出産児へ感染させることがあります。口腔性交による咽頭への感染も少なくないことが報告されており、近年の性行為の多様化に対応した、きめ細かな情報提供が求められます。

一方、顕著に症例数が減少していた淋菌感染症においても、近年、無症候化や耐性菌の出現などが問題となっており、1999年以降連続して増加傾向にあります。

若者の性の自由化に伴い、今や性感染症は日常の性生活に深く潜り込み、急速に拡大していると考えられます。本特集では21世紀に入り、本格的な流行の様相を呈してきているわが国の性感染症について、多様化する若者の性行動の実態等も踏まえて最新の知見をレビューするとともに、その拡大防止策を探ります。